



**KANSAI
UNIVERSITY**

教職支援センター一年報

2013

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2013』目次

教職支援センター年報の発行に寄せて	教職支援センター長	山本 登朗	1
<小論文>			
学生自身の生き方を問う「生徒・進路指導論」の授業 ～児童生徒の葛藤に寄り添うために～	非常勤講師	南 悟	2
G.H. ノイヴェークにおける<知識/技量>の意味論 ——教員養成における<理論/実践>問題の手がかりとして——	非常勤講師	山名 淳	11
小学校家庭科教育の課題と学校教育上の位置	文学部教授	山本 冬彦	21
<報告>			
関西大学「教職概説」の一クラスにおける学生たちの教科の好き嫌い	非常勤講師	池上 徹	31
「教育実習・教職実践演習・教育実習事前指導」についての報告	非常勤講師	尾崎 進	37
体罰問題をどう扱うか—学生の経験と意見より—	非常勤講師	保田 その	42
<ショートレポート>			
「多文化主義」教育の現在	非常勤講師	印藤 和寛	48
学校映画のすすめ	非常勤講師	椎口 育郎	55
各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科			58
介護等体験 参加者数			60
中学校・高等学校教育実習生数			61
教員免許状取得状況・免許取得者数一覧			62
教員採用試験合格者状況・合格者数			69
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果			72
教員採用試験 試験日・合格発表日等			73
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～			75
2年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について			76
介護等体験事前指導について			78
本学卒業新任教員の方々との情報交換会について			79
3年次生対象「教育実習ガイダンス」について			80
教員養成フォーラムについて			82
教員採用試験合格者との情報交換会について			84
教職専門科目担当者研究会について			86
教員採用試験合格者壮行会について			87
教職に関する専門教育科目担任者一覧			88
教育実習出向指導校一覧			94
教職支援センター 利用状況			96
教員免許状更新講習一覧			98
教職支援センター年報 投稿規程・執筆要領			99
教職支援センター委員会委員名簿			101
教職支援センター規程			103

学生自身の生き方を問う「生徒・進路指導論」の授業

～児童生徒の葛藤に寄り添うために～

関西大学非常勤講師 南 悟

はじめに

関西大学で教職必修科目「生徒・進路指導論」の講義を担当して3年を終えることができた。兵庫県の高校国語教員としての勤務経験37年間のうち31年間を夜間定時制高校で勤務した私が、働きながら学ぶという困難な生活の中を生きる生徒たちとの付き合いで得た数々の貴重な経験から、教員を目指す学生の皆さんに、現場での課題解決のための問題提起を行ってきた。

「生徒・進路指導論」の講義テーマは「生徒の生きる力を育み今日よりも明日をよりよく生きていくための指導援助を行うものである」とシラバスに表記した。児童生徒の生きていくための力を育むためには、子どもの葛藤に寄り添う教員としての主体、まずは学生の皆さんが人生の困難を乗り越えていく力を身につけなければならないだろう。

「生徒・進路指導論」では一貫して、「他人の傷みを共有し共感する感受性」を養う、「一番しんどい子どもの葛藤に寄り添う」、「困った子は、困っている子」という講義テーマに沿って、種々の課題を克服し問題解決できる現場での実践力を身につけるための技法を獲得すべく展開してきた。このような課題の設定は、筆者自身の教育実践経験に基づくとともに、従来から生徒指導および進路指導の両領域で練り上げられてきた実践方法の蓄積をも踏まえたものである¹。

また、「生徒・進路指導論」の授業者としては、これまでの日本の教育運動の歴史の中で積み重ねられてきた先輩教師のすぐれた実践とその遺産、こどもの声を引き出し、共感的な関係を築きながら共に歩く、寄り添うといった実践の知見が、現行の新自由主義に基づく格差・競争・評価などによる現場の疲弊と世代間の断絶によって若い教師に引き継がれていないことを懸念するものである。こうした継承は、現職段階においてのみならず、養成段階としての大学の教員養成課程において、より強く求められるべきではないだろうか。

その意味でこの論稿は、かつての「全国同和教育研究協議会」などによって取り組まれてきた同和教育、解放教育運動がその中心に据えた、「親の生活史に参入し子どもとともに歩く教師になる」という視座に基づく取り組みや、戦後の綴り方教育運動の実践・知見を継承する試みを私なりにまとめたものである、と位置づけることができる。

¹ 生徒指導あるいは進路指導の領域で、生徒の多様な人生・生活背景から生まれる葛藤に寄り添いながら、その生徒自身が他者との関係の中で自己の尊厳を再生させ、他者を認め、困難を克服していく力や感性を共に獲得していく過程を共感的態度で支え媒介する実践方法が注目されてきた。それはノーエクスキューズの厳罰指導とも偏差値輪切りの進学指導とも、実践の哲学を異にする。以下の文献を参照のこと。

福地幸造 (1981) 『定本・落第生教室』明治図書、南悟 (1994) 『定時制高校 青春の短歌』岩波ブックレットNo.351 岩波書店、遠藤芳男 (2009) 『卒業—高校生に詩を書かせた先生』駒草出版、瀬川正仁 (2009) 『若者たち—夜間定時制高校から見えるニッポン』バジリコ株式会社、全国高等学校定時制通信制教育振興会 (2013) 『誇りある青春：働く高校生の生活と意見』第35集 (毎年刊行)。

教材としては、拙著（2009）『生きていくための短歌』（岩波ジュニア新書）を中心に用い、定時制高校生が詠んだ短歌と、そこに見られる生き難い人生をそれでも前向きに生きるたくさんの生徒の姿、阪神大震災を通して生み出されてきた数々の生活体験記録（作文）や短歌などを積極的に紹介してきた。生きることの辛さや喜び、仕事の充実感や達成感、家族や友だちを亡くした悲しみなど、この世を懸命に生きる生徒たちの姿があり、受講生の皆さんが若者の爽やかな感性で共感し、講義で提起された課題を真摯に受け止め臨んでくれたことは、授業者として大きな喜びである。

I 夜間定時制高校生が詠んだ短歌

講義でも学生に読んでもらった定時制高校生の数首の短歌を紹介する。

人間の死ぬより辛い生きること大きな根を張り負けずに生きる

阪神大震災で両親を喪った生徒が、荒んだ生活を定時制の学びで立て直して24才で卒業。

震災で隣家の家族がれき下埋もれた声と焼け野原

仲良しかった隣の家族5人全員が焼死。救えなかった悔しさと震災のトラウマから中学の不登校を経て立ち直りのために詠んだ。

母が死に父は失踪兄と俺夜学四年目今生きている

小学校5年時に母が癌で亡くなり、それがショックで父は失踪して行方不明になり一人で生きる決意を詠んだ。

俺は今大工の華咲く15歳足場上がり破風板を打つ

中学校時代不登校であった生徒が大工の仕事で自信と誇りを取り戻した。

おっさんが首になった検品の作業任され頑張り通す

日系ブラジル人生徒。生活苦で崩壊寸前の家族を支えて定時制高校を卒業し正社員に。

定時制苦しみ悩んで辞めようと思った時の友の励まし

警察の世話になり退学を覚悟するも級友の支えで復学。人の役に立ちたいと結婚詐欺に遭った生活困窮の青年2人の生活を3年間支えて自立させた。

夜学来てやっと分かった身に染みる「普通の」「まともな」どうでもいいや

小中学校の不登校ひきこもり経験からアルバイトとの両立を果たして卒業。

II 夜間への偏見が取り除かれた

定時制高校に対する世間の評価は、勉強ができない、柄が悪いといった負のイメージが大である。各種の補助金制度廃止や生徒募集停止など定時制高校をめぐる状況も厳しい。

しかし、そこは、世の中の諸矛盾が集積する場所。それは貧困や家庭崩壊の影響を受けての個人の責任に押し付けられない要素、学力低下、粗暴、不登校やひきこもり、体力低下や病弱者、在日外国人や中高年、さらには障がい者、シンナー吸引やリストカットなどを経験した生きることの難しい人々が、人間の再生をかけ自己の尊厳を取り戻す場所である。さらに強調す

べきは、定時制高校には現代の学校教育が抱える負の課題、学級崩壊や不登校、教員の体罰と生徒の暴力行為、生徒間のいじめなどは極めて少なく、むしろ人生のやり直しと生きる勇気が与えられる場である。このような学校は世界的にも希少で貴重な存在である²。

夜間定時制高校とそこで働きながら学ぶ生徒たちの姿に触れた関大生の誰もが、驚きを禁じ得なかった。これまで出会うことのなかった定時制高校生に対する価値観の変容がなされていたのである。困難な生活を生きる力強さ、働く生活者の息吹、ひたむきな姿、どれをとってみても驚きであっただろう。多くの学生の感想文の中から一人だけを紹介する。

夜間への偏見が恥ずかしい

A学部 Aさん

この講義全体を通して思ったのが、夜間に通う人たちへの偏見です。私の高校は、明石市にある〇〇高校でしたが、ここは〇〇高校という夜間学校と敷地が同じで校舎も一部一緒でした。ドロドロの作業服を着て学校に来る人もいれば、金髪で柄の悪そうな、いわゆるヤンキーの人も登校していました。最初見た時は、「こいつら、何しにここに来とんやろう？」や「そんな汚い服装で学校来んなや」などと心の中でずっと思っていました。しかし、この授業で私は、考え方が変わると同時に、今まで夜間高校生をバカにし、軽蔑していた自分が恥ずかしく思いつつ、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。例えば、ドロドロの作業服で登校する生徒は、当然ドロドロになる仕事をしてから学校に来ています。それは、大工さんの仕事かもしれないし、工場かもしれない。ただ言えるのは、彼らは私たちの住む家や生活する上で大切なものを作ってくれているのです。金髪もお洒落を楽しんでいるのだと。はっきり言って、そんな心身共にへろへろな体で学校に行こうと思うのが、すごいと感じました。後略（2012年春学期）

たとえばまた、この1月17日阪神大震災の19年目の記念日に、関西大学高大連携事業の企画として、神戸市立楠高等学校（定時制）の生活体験発表会に学生8人とともに参加した。定時制では全国的に取り組まれている行事であり、ここは私の知友や後輩教師が多数いて交流がある学校でもある。この日、8人の生徒が約300人の全校生徒の前で壇上に立ち、それぞれが、自分の辛い生活経験、親の自殺や不登校経験やいじめや虐待経験など、他人に知られたくないと思われるような重い話をたんと語り、生徒全員が集中して聴いているのである。誰もが高校を卒業する目標と生きる決意を語っていたが、定時制高校には「他人の辛さや傷みを共有し共感する」という貴重な取り組みが継続されていて、参加した学生の誰もが涙し、勇気をもたらすと感激し定時制高校の値打ちを実感していた。

²筆者は、以下の論稿などで、上述したような定時制高校の独自の教育的意義からその存続の必要性を論じている。南悟「今こそ定時制高校の教育力を」『世界』（第813巻、岩波書店、2011年2月）、南悟「定時制高校という場をなくしてはならない」『世界』（第658号、岩波書店、1999年2月）、南悟「定時制高校青春の歌—震災を詠む」『国語通信』（第347号、筑摩書房、1996年7月）、南悟「短歌で詠み継ぐ定時制高校の青春」『解放教育』（第436号、明治図書、2004年4月）、南悟「生きること・学ぶこと・歌うこと」『教育科学セミナー』（第42号、関西大学教育学会、2011年3月）。

Ⅲ 学生の葛藤に寄り添う―「家族の崩壊を支える」

夜間定時制高校とそこで働き学ぶ生徒たちの生き方を多く紹介してきたが、当初受講生の中には、なぜ定時制なのかといった戸惑いや抵抗感もあったようである。だが、2011年度春学期に書かれた女子学生の次の感想文が、授業を進めるうえで大きな契機となった。なお、文中ビデオとあるのは、NHKテレビドキュメンタリー『31文字のエール』という、定時制神戸工業高校の生徒たちの働き学ぶ営みが短歌を通して紹介されたもの（2010年1月11日成人の日特別番組全国放送）。

家族の崩壊を支える

B学部 Bさん

短歌を書くことによって、心の中に秘めていた思いを誰かに伝えることができる、自分の中の心の闇を短歌という形で吐き出すことができることは素晴らしいと思いました。

私の家庭は、中学校の時に父が会社をクビになり、母は夜逃げして、兄妹4人いたのですが、一番上の兄は遊びまわって帰ってこず、2番目の兄は自閉症で家にこもり、一番下の弟はショックで中学でいじめにあい不登校になりました。その後、父もショックでうつ病になり、何もかもがドラマのような展開になってしまいました。その時、私も同情されたくないとか、どうせ私の気持ちなんて誰にも分からないだろうとばかり思っていました。しかし、ここで私がなげやりになったら、残された家族がめちゃくちゃになってしまうと思って、掃除や洗濯、弁当作りから、買い物食事の用意まで、家のことはすべて私一人でした。

私には〇〇（スポーツ）の支えがありました。中学時代から〇〇に打ち込み、おかげで高校は全額免除でした。つらいことはたくさんありましたが、今こうして大学で勉強できているのは〇〇があったからで、とても幸せに感じています。

正直、先生の講義を受け始めた頃は、夜学生の話聞いた時に不幸ぶっているのではないかと、心にもやもやした気持ちを持っていました。しかし、先生の話聞いてビデオも見て、その人たちの気持ちが分かりました。私は自分の辛い話をするのが嫌いです。けれども、人に聞いてもらって心の中の何かが軽くなるという矛盾もあります。

その後、私の弟は不登校の子が学ぶ高校を卒業し、今年の春から大学の薬学部に通っています。私の後ろについて回ることしかできなかった弟が、この前の震災では積極的にボランティアや募金活動をしたりと本当に成長してくれました。母の失踪で心に溝があった弟も乗り越え誰かの役に立とうと頑張っています。夜学生の方も、辛かった経験を乗り越え、他人の方のために頑張れることは本当にすごいことだと思います。辛いことやしんどいことも自分と友だちとの交流で決まると思います。夜学生の皆さんや弟を見て、その大切なことを学びました。（2011年度春学期）

こうした学生がいることに私自身が励まされてきた。家族の崩壊を防ごうと女手一人で困難な家庭を支えるその姿に私の方こそ生きる勇気が与えられるのである。この感想文の半年後には、新たな事実が報告された。8年前に出奔した母が、駆け落ち相手の男性が病死したことで単身となり、彼女に許しを申し出てきたとのことである。自閉症の兄は、8年ぶりに会ったお

母さんの傍に無言で寄り添い、母の片方の手を自分の両手で握りしめ続けたそうである。彼女は自分の気持ちよりも家族の幸せと再生を願っているのだと思い、込み上げてくるものがあった。

そして、この文章は彼女の承諾を得て、その後の講義資料として活用した。教員として、目の前の児童生徒の葛藤に寄り添う感受性を培ってもらったためである。関大生の中にも生きる上での苦悩や困難、様々な葛藤を抱えている学生が多くいることを知ったが、これは、この講義を始める時には私自身が正直想定できなかったことである。定時制高校生に比べてあらゆる面で恵まれているだろうという私の勝手な思い込みがあって、その不明を恥じた。

「生徒・進路指導論」の講義で、定時制高校生が詠んだ短歌に触れ、受講生自身が、自己と他者の生活・人生における困難とその挑戦に対する想像力と意志を得る契機となったのではないかと。それは、生徒・進路指導において教師に求められる本質的な資質を獲得することにつながっている。

IV 家庭に居場所をなくした学生

その後、2011年度秋学期の授業で、ある女子学生から問題提起が出された。

彼女の友人である関大の女子学生が両親からの身体的、心理的、金銭的な虐待をこの2年間受け続け、自殺を考えているというものであった。私も直接会って相談を受けたが、成人の関大生であるだけに非常な驚きであった。この2年間食事を与えられていないこと、両親からの度重なる暴言と日常的な暴力。にわかには信じがたい内容であったが、その訴えは真実味をもって迫ってきた。私自身、夜間定時制高校生の生き難い人生に幾度となく立ち会ってきたが、両親からの虐待は最も困難で厳しい問題である。嗚咽して苦しい胸の内を吐露する学生を前にして私は「2年間もよく耐えた、死なずによく生きてきた」としか言えないながらも、何らかの支援を約束した。

非常勤講師といえども学生にとって私は先生である。教員であれば、児童、生徒、学生の困難や葛藤に寄り添い援助を行う、これが私の心構えであり、「生徒・進路指導論」の実践課題でもある。また、子どもに愛情を持って接すれば必ず応えてくれること、その点で私が40年間の教員生活で一度も騙され裏切られたことがないことを述べ、生徒・進路指導を含めて子どもの葛藤に寄り添うことの大切さ、あり方を伝えている。

そこで、虐待問題への支援と解決策を求め、虐待問題やDV相談を受け付ける大阪府のドーンセンターやパープル・ホットライン（電話相談）、児童相談所、さらに関大の学生相談窓口と学生主任や知人の弁護士には本人同席で相談し支援を求めた。授業料免除、奨学金、生活支援金、緊急避難場所の提供など、結局、成人大学生には何ら公的な支援が受けられなかったが、学生相談窓口の職員の激励と学生主任の先生からは多大の援助を受けてきた³。

³ 子ども期に比較して青年・成人期の被虐待経験者に関する実態把握はまだ不十分であり、その支援体制についても課題が多い。以下の文献が参考になる。永江誠治／花田裕子（2011.06）「思春期・青年期の虐待被害者の自立支援ネットワークにおける現状と課題」（日本子ども虐待防止学会編『子どもの虐待とネグレクト』13(1)）。

ある公的機関の係員からは、大学をやめて働くことで自立生活をとのアドバイスがあったが、学費の全てを学生支援機構の第二種奨学金の借入で賄っているため、すでに消費した2年半分の借金だけが残る、退学の選択はなかったのである。

こうした場合にこそ、人が人を支援するボランティアが必要で、とりあえず私たち夫婦が引き受け、彼女の友人の協力を得ながらの支援・激励を行ってきた。

ある日の講義で、彼女の友人である受講生Cさんは、虐待を受けている友人の事情を知った以上無関心でおれない、自分一人で抱えておけないし解決できないので、皆さんの応援が欲しいと涙ながらに問題提起を行った。内容の重さに150人を超える学生の誰もが身動きせず聞き入り、涙ぐむ学生が何人もいた。

「生徒・進路指導論」受講生のみなさんへ B学部 Cさん

私がこの授業を通して学んだ事は「傷みを共有する」ということ。

私が大学で出会った一番の親友は親から虐待を受けていました。

虐待という言葉はテレビなどで耳にする程度の言葉であって、まさかこんな私の身近で起こっているなど思いもしませんでした。

彼女の両親は彼女に向かって「死ね」「生まれてこなければよかった」など言葉の暴力に加え、肉体的暴力、また彼女の分の食事が用意されることもありません。

初めて彼女から話を聞いたときは、とても驚いたと同時にひどく胸がしめつけられました。自分はそういった状況に直面したことがなかったため、100%彼女の気持ちを理解することはできない。一体自分には何ができるだろうか？と考えたがなかなか良い解決策が思い浮かばなかった。そこで、さまざまな生徒さんを支援してきた南先生に相談しました。そこでわかったことは、何か特別なことをしなくてもつらい体験、苦しい思いなど彼女が心に溜めていたものを少しでも共有することで、彼女の肩の荷を少しでも軽くできるということだった。普段周りに弱音を吐くこともなく凜としている彼女だが、一人で抱えるにはあまりにもその問題は重すぎた。そんな彼女が全てを吐きだし安心できるような場所に自分がなればという一心だった。

彼女を支援しているという口調になっていますが、逆に私もしんどい時には彼女に何度も救われている。言い古された言葉ですが、人間やっぱり一人じゃ生きてはいけないと思う。どんな形であれみんな誰かに支えられながら生きていると思う。

一時期は本当に「死にたい」とまで考え、表情も暗かった彼女ですが今は実家を出て一人暮らしという新たなスタートをきりました。

まだまだ精神的に不安定になることも多いし、アルバイトで体は疲れ切っているため心配な面は多いですが、少しずつ彼女が前に進んでいることが私はとても嬉しいです。

私が彼女との出会いを通してみなさんに伝えたい事は、苦しんでいる人のわずかなサインを見落とさないで欲しいということです。

間違ってもかまわないので、気になることがあれば一声かけてあげてください。

その一声で救われる人はたくさんいるはずです。(2011.11.22)

V 関大生が自分を語る

この報告を受けて、受講生の全員が、家庭に居場所のない学生の孤立を防ごうと激励文を書いた。身近にいる虐待に苦しむ学生の傷みに若者らしい感性で共感し、その思いを共有することで、これまで語られることのなかった自分の辛い体験を見つめた学生が何人もいた。誰もが生きていて欲しいとの思いでエールを送った。その中から一人の学生のメッセージを紹介する。

顔に火傷を負ったこと

C学部 Dさん

2年間虐待を受け続けた人と直接話をしたことはないけれど、弁護士を志望している中でモラルハラスメントがらみの離婚事例を研究する中で、“戦意喪失”という状態が一番危ないのだと分かってきました。長い間他人から否定され続けると、自分でも自分を肯定できなくなってしまう。それは、その人の何かが悪いわけではなく、たまたま加害者がそばに来てしまったからそうってしまっただけのことだということを、よく理解しないといけないと思います。

そのお友達の方は、たまたま親の自覚を持ち続けられない人のもとに生まれてしまって、それは不運なことだと思うけれど、幸い親から離れて暮らせる年齢ではあるし、今から幸せに向かっていくことはできる。私は顔に火傷を負ったこと自体は不運なことだったけど、苦しくてもなんとか死なずに生きてきたので、今は比較的幸せです。顔も名前も知らないけれど、私はお友達さんに生きていてほしい。死なないでほしいです。どうしてこう思うのか説明はつかないけれど、たぶん、このお話を聞いてお友達さんが元気になることでCさんが元気になってほしい。こんな優しい人が悲しい思いをするのは私がつらいと思うのも、ひとつ理由になると思います。

翌春からロースクールで学ぶ予定の彼女は、講義の中で受講生を前に教壇に立ち、これまでの勉強の頑張りや進路の選択について、弁護士か教職かまだ決められていないなどの報告をしてくれた。一人っ子の彼女は5才の時に焚火の事故で顔に火傷を負った。辛かった体験やアルバイト先の学習塾で、子どもとの関係の取り方などに困っていることなども話してくれたが、教員として生徒の前に立つなら、子どもの持っている残酷な一面、揶揄したり、囃したりすることに負けないだけの気概を持たなければならないと助言してきた。

彼女以外にも、アルコール中毒症の父からの虐待と知的障がいを持った母のネグレクト経験の女子学生、交際男性からのDV被害で苦しんだ経験、知的障がいの兄のことを見据えた男子学生、「僕はひとりぼっちです」という文章を書くことで被虐待の学生の思いにつながろうとした男子学生、躁うつ病で苦しむ男子学生、親の自殺に向き合った男子学生、両親を亡くして一人生きる女子学生など、これまで語られることのなかった自分の辛い体験に向き合い、「自分を取り戻す」作業を始めたのである。

最後に、エールを受け取った学生が受講生にあてた礼状を付記しておく。3年間の虐待による自尊感情の低下と生きる様々な困難に苛まれながらも、昨春卒業を果たし、実家を出て一人暮らしをしている。5月の連休に帰省した折、貴重な時間を割いて千里山キャンパスの講義を訪れ、後輩の受講生を前に近況報告をしてくれた。「家庭に居場所のない私は、一番しんどい子に寄り添うというこの講義で命を支えられました。先生を目指す皆さんは、どうか生きることが難しい子どもに寄り添ってあげてください。」

「生徒・進路指導論」受講生の皆さまへ（礼状） B学部 Eさん

先日は、私の家族のことでたくさんの励ましと応援のメッセージをもらってとても元気をもらいました。

南先生と出会うまでは、自分の親に「死ね」や「生まれてこなければよかった」など罵声をあびせられたり、もう2年近くご飯を食べさせてもらえなかったりすることは、辛いことと思うと同時にとても恥ずかしいことだと思っていたので、誰にも相談することはできませんでした。

友だちに相談しても心配をかけるだけであって何も変わることはないだろうときめつけ誰にも相談せずに生きてきました。どれだけつらくても絶対に泣いちゃいけない、私のキャラは泣いたりするキャラではなかったの、人前では泣きませんでした。

そして今思えば、これまでウソの笑顔で自分を偽って生きてきました。そんな生活が1年2年と過ぎ、親からの暴力、罵声もヒートアップし、もう死んでもいいか、生きる意味もないしと思っていた矢先にCさんと出会い、南先生に出会いました。

最初は本当に相談することが恥ずかしく、笑われてしまうだろうと思っていたので、人に話すことはこわかったです。

しかし、本当に親身になって聞いてもらい、私の家族のことなのに一緒に泣いてくれる友だちと出会い、私はそれだけで心が楽になったと思えました。

もしかしたら、私よりもっとしんどいことで悩んでいて、こんなことで悩んでいるなんて馬鹿らしいと思う人がいたらごめんなさい。

ただ私は、少しずつ前に進み自立していこうと家を出ることを決め、たくさんの人、友だちに支えられながら生活し始めました。これからもきっとたくさん問題にぶつかりくじけそうになると思いますが、支えてくれた人たちが裏切らない人生を歩んでいきたいと思っています。

みなさん、私のためなんかにメッセージを書いて下さってありがとうございました。

(2012. 1. 10)

おわりに

定時制高校では生活の影の部分が表に現れることは日常であるが、関西大学では極めて稀であり、表の華やかな部分だけが目立つように思われる。表には裏、光には影があるように、人生は表裏一体である。「生徒・進路指導論」では、この影に秘められている生きる上での葛藤や苦悩に拘ってきた。自らを苦しめる様々なトラウマや被虐経験に対して目を逸らさずに向き合い自己変革を目指すためである。また、この拘りは、大学における教職必修科目「生徒・進路指導論」では、一般的にも受講生に生徒・進路指導の基礎となる想像力や共感的態度を育むことが重要なのではないかという認識に支えられている。

このEさんの手紙以降、2012年度春学期の授業からは、さらにたくさんの学生が教壇に立ち受講生の前で自分の体験を語ってくれている。具体例をあげると、いじめの被虐待経験、躁うつ病とパニック障害、てんかん症、在日コリアン、接客業で家計を支える女子学生、リストカ

ットからの立ち直り、親の自殺、ギャンブル依存症、スポーツの挫折、うつ病でのひきこもり、王冠を着用する男子学生、教師の暴力からの不登校ひきこもり経験、中学時の柔道部での凄惨な体罰、就活の挫折によるうつ病発症と休学、関大の学部と院の6年間、あるトラウマから人前でマスクを外せなかった男子学生などである⁴。

それらの発表を聞いた学生からは必ず感想文が出され発表者との交流、循環作業が行われ、授業の枠を超えて自身の生き方の深化を追求している。引き続き、教師になろうとする者が、狭い意味での生徒・進路指導にとどまらず問題を吟味しながら、子どもの葛藤に寄り添うことの意義と、教育現場の課題解決のための実践方法をつかみとれるよう展開していきたい。

参考文献

・南悟（2009）『生きていくための短歌』、岩波書店

追記 本稿で紹介した5人はすべて卒業しているが今も交流があり掲載の承諾を得ている。

⁴このような自分を語り他者との共感的な繋がりを通して自己変革を目指す実践方法は「ナラティブ論」「ライフヒストリー論」などで研究されているが、次のような文献がある。桜井厚（2012）『ライフヒストリー論』弘文堂、M ロンター、M・キャロリン・クラーク著、立田慶裕、岩崎久美子、金藤ふゆ子、佐藤智子、萩野亮吾共訳（2012）『成人のナラティブ学習—人生の可能性を開くアプローチ』福村出版、J・S ブルーナー著、岡本夏木、吉村啓子、添田久美子共訳（2007）『ストーリーの心理学』ミネルヴァ書房、など。